

佐藤誠二さん 人と学問によせて

佐 藤 博 明

は じ め に

昨年7月はじめ、突然、誠二さんから「来春、定年退職するに当たって、『同志社商学』が退職記念号を編んでくれることになり、については“人と学問”のコーナーで書いてもらえないか」というメールが届いた。思いがけない“難題”に、いささか困惑したが、結局、引き受けることにした。

誠二さんとは学部（明治大学商学部）、大学院とも同門（恩師・松尾憲橋先生）で、同志社大学に移るまでのおよそ30年間は、静岡大学の同じ学部の同僚であったことや、研究分野もほぼ同じで、長い間、共同研究のパートナーとして一緒に仕事をしてきた、いわば《知りすぎた男》の仲である。しかも、同姓ながら、年齢的には筆者が二回り近く上で、日頃、「誠二さん」の呼び名で通してきただけに、今さら畏まった呼び方もできず、困った。ことほどさように難しいテーマだが、ここではいつも通りの呼称で、「誠二像」のあれこれを、思いつくまま書くことをお許しいただくことにしたい。

知のコモン 同志社大学

たしか2014年の秋口だったか、恒例の京都の研究会からの帰路、新幹線の中で、誠二さんがボソッと「実は、今度、同志社に移ることになりそうです…」と一言、その時は特にその理由や事情について聞く間もなく、そのまま静岡駅に着いた。静岡大学の定年が近いことや研究環境、勤務条件など、この先の諸々の事情を考えての決断と思い、同志社大学は願ってもない新天地かと納得した。

京都の研究会は、1960年代末、宮上一男先生のもと、門下生たちを中心につくられた企業会計制度研究会だが、筆者も70年代半ば頃から参加、宮上先生が亡くなられた後は、加藤盛弘先生が主宰する形で、同志社大学を会場にほぼクォーターリーに開かれてきた。研究会は半世紀以上続いているが、メンバーの所属大学や年齢構成も多様で、毎回、“鮮度”の高い報告と刺激的な議論が交わされ、発信力の高い、アクティブな会として知られている。誠二さんも、1986年、静岡大学に赴任して以来のメンバーで、ともに静岡から通いつけている。

同志社大学といえば、筆者にとって特に忘れがたい先生がおられる。本誌『同志社商

学』創刊(1949年 昭和24年)当初から健筆をふるわれ、戦後わが国会計学の科学的研究-批判会計学の発展の一翼を担い、気鋭の研究者として知られた根箭重男先生である。やがて、浅羽二郎先生(1954年)や内川菊義先生(1959年)、加藤盛弘先生(1961年)がこれに加わり、以来、本誌には4先生の論稿がきびすを接して掲載、大阪市立大学や京都大学、立命館大学とともに、関西圏におけるアグレッシブな会計学研究の拠点として時代を画したことである。

筆者が学生の頃、松尾ゼミでは、いずれも1956年に出版された『新しい会計』(全5巻、青木書店)や『現代経営会計講座-戦後日本の経営会計批判-』(全4巻、東洋経済新報社)が必読のテキストであった。この二つのシリーズは、戦前から戦後にかけての蜷川虎三、畠中福一、中西寅雄、木村和三郎、馬場克三、宮上一男、岡部利良ら諸先生の研究・理論活動の成果の上に、根箭重男、中村万次、松尾憲橘、神田忠雄、浅羽二郎先生ら、東西の気鋭の研究者がともに論陣を張り、戦後批判会計学の集成と台頭を象徴する道標的な成果とされている。まさに時代を切り拓く、研究集団・レジェンドたちの結集から生まれた、歴史的成果である。

当時、院生だった筆者は、東京での学会の前日、新規の出版の打ち合わせとかで、松尾先生が手配した集まりで、宮上、馬場、中村、根箭先生らを、熱海・宮ノ下の明治大学の寮にお迎えし、はじめて諸先生に親しくお目に掛る機会を得た。普段、文献でしか存じ上げない諸先生に直接お目にかかり緊張したが、中でも、ダンディで気さくな根箭先生は魅力的であった。しかも、食後、先生から「佐藤君、街に飲みに行こう」と声をかけられ、寮から熱海の市街にタクシーをとばし、したたかご馳走になった。その頃、先生が著わされた『会計理論の展開』(有斐閣、1956年)や『保守主義会計の発展形態』(ミネルヴァ書房、1961年)で、批判会計学の理論的方法と論点、展開方向を学ばせていただいていただけに感激した。その根箭先生は、1962年12月、わずか53才で亡くなられたが、その時のショックは今もなお鮮明である。その翌年、筆者は静岡大学に籍を得、着任した。

根箭、浅羽、内川、加藤の諸先生以来の伝統と、“同志社シューレ”ともいうべき学風の上に、つねに先端的なテーマに挑戦し、研究成果を発信して斯界を牽引する、第一級の研究者集団と恵まれた研究環境のもと、《時代を率いる力》を標榜する本学商学部に、会計学担当の教員・研究者として迎えられた誠二さんは、まさに幸運の極みというほかはない。

知のランドスケープ 豊かな研究群

端的に言って、誠二さんは“多彩・多能”の人である。それは、この分野での進展著

しい問題状況に対する鋭い感度や広い視野からの、究めるべき論点の的確さと抜群の“仕事力”による、先駆的で繁多な研究成果に表れている。

まず、大学院博士前期課程から後期課程にかけての5年間に、ドイツ・シュミーレヴィッツ経営計算論を中心に、7本の論文を『大学院紀要』など学内誌に発表、そこから最初の勤務校・鹿児島経済大学で、シュミーレヴィッツ理論を中心に、ドイツ会計学研究の基軸を固め、それらの業績を携えて1986年4月、静岡大学に籍を移した。誠二さん33歳の時である。

その後の精力的な研究活動を通じて、今日までドイツの会計制度・理論の展開や EU-IFRS を基軸とする会計の国際的調和化をめぐる動向など、時宜を得たテーマでこれまで都合75篇の論文を発表、それら諸論考の膨大な蓄積の上に、この間、数多くの著書を著わしてきた。その著作群は、1993年の『現代会計の構図』（森山書店）をはじめ、学位（博士（経営学）・明治大学）請求論文となった『会計国際化と資本市場統合～ドイツにおける証券取引開示規制と商法会計法との連携～』（森山書店、2001年）や『会計基準の統合と分岐』（森山書店、2020年）など単著5点と、『EU・ドイツの会計制度改革- IAS/IFRS の承認と監視のメカニズム-』（森山書店、2007年）など編著と共著各2編、さらに11編の共編著での分担執筆である。うち、筆者らとの共同研究では、1999年の『ドイツ会計の新展開』（森山書店、佐藤博明編著）をはじめ、『ドイツ会計現代化論』（森山書店、J. ベェトゲ・佐藤博明共編著、2014年）など3点の編著と、『ドイツ会計論』（森山書店、J. ベェトゲ他著・稲見亨監訳、2018年）など、2編の翻訳書で執筆を分担している。さらに、10指に余る翻訳や書評、報告書と、13点の調査・学会報告がこれに加わる。

誠二さんは2度の在外研究を経験している。1度目は1991年9月からの、ドイツ・ヴェルツブルグ大学 (W. フレーリックス教授、経営経済学講座) への1年余と、2度目は2000年3月から6月までの、ミュンスター大学 (J. ベェトゲ教授、会計監査論講座) である。誠二さんの研究者としての真摯な態度と“仕事力”は、1度目の在外研究から帰国間もない94年と翌95年にかけて、この時期にドイツで台頭した新しい貸借対照表能力論と会計基準の国際的調和化の動向をテーマに、立て続けに8本の論文を発表したことにも表れている。同様に、2度目の在外研究からの帰国後も、前述の学位請求論文となった2001年の著書などで、かの地での精進と学究ぶりを示している。ちなみに、同志社大学に移ってからも、11篇の論文と単著1点(2020年)の刊行、翻訳書での分担執筆がある。

研究者・誠二さんの軌跡は、ドイツ会計理論・制度の研究を基点に、1900年代後半以降のグローバル資本市場の進展を背景とする、会計基準の国際的調和化としてのEUにおける一連の制度改革、とりわけHGB(ドイツ商法)会計の制度的特性に即した、ドイツにおけるIFRS・国際的会計規準の“受容”と“接近”の諸相を析出・闡明したところにある。つまり、資本市場指向をキーワードとする、情報機能重視のIAS/IFRS

に対応する、ドイツにおける会計制度改革の文脈の中で、3つのマイルストーン-1985年会計指令法 (BiRiLiG) から会計法改革法 (BiReG 2004年) を経て、2009年の会計法現代化法 (BiMoG) に至る一連の法改正を通じて、ドイツ商法会計法に表れた、グローバル・スタンダードに対する“適度な接近”(ドイツ的受容と分岐) とその制度的意味を析出したことである。こうした、世紀の転換期前後およびそれ以降のEU-ドイツの会計理論・制度の変容をめぐる研究において、誠二さんはつねに“フォワード”の位置で、着実に成果を積み重ね、自らの〈知のランドスケープ〉を描き出してきたのである。

誠二ワールド ディープな教育

かつての頃、静岡大学での会計関係の講義は、会計学を主に筆者が、管理会計論を誠二さんが担当、簿記と財務諸表論は各年交互に受け持ち、加えて2年次生向けのサブゼミと3,4年次生のゼミナールをそれぞれ担当した。

ただ、誠二さんのゼミは、毎年、志望者が多く、学部でも人気ゼミの一つであった。その秘密は、多分、誠二さんのフランクな人柄と、学生と同じ目線で、親身に対応する誠二流のゼミ運営によるものかと思う。誠二さんのゼミ運営は、3つの原則からなる“オープン・ザ・ドア”(ゼミ論集『うでまくり』第3号) だという。まず、研究室のドアはつねに開け放してゼミ生交流の場とし、次いで、ゼミを互いに偏見のない、闊達で風通しの良いフォーラム空間に、そしてそこから、ゼミを学生生活のさまざまな問題解決のコミュニティにするというものである。まさに、ゼミこそ「大学の中の大学」-学生の知と人間的成長の“圃場”と捉える、誠二流の教育観に由来するもので、そのスタンスは同志社でも同じだという。

それだけに、誠二さんのゼミの卒業生は多く、静大では在任28期の、学部・大学院で228人、同志社が3期で46人の、合わせて274人を送り出し、うち女性はその4割を占めるといふ。外国人留学生も10数人と多く、その大半は中国からの留学生だが、3名のドイツ人留学生(ボン大学との交換留学生)もいる。卒業後の進路では、その大半がさまざまな業種の企業・事業所だが、ほか公認会計士、税理士など10人を超える会計専門職や地方自治体・中央省庁の公務員、研究者など多様で、うち4組がゼミ生同士で結婚、夫婦で寿司屋をやっている卒業生もいるという。こうした卒業生の進路分布や活躍ぶりからも、誠二さんの面倒見のいい、自由でアットホームな雰囲気の中で、ゼミ生は、在学中、しっかり学んで“知の力”を鍛え、豊かな個性と人間力を育み、キャンパスライフを堪能した様子が窺われる。それだけに、卒業後のゼミ生の結束も固く、ことあるごとに誠二さんを囲んで集まり、交流を深めているといい、近くは、昨年夏、誠二さんの古希を祝って、多くの、それも大半がOGの卒業生が、祇園祭の観光をかねて

京都に集まり、旧交を温めたという。まさにゼミ運営3原則の面目躍如であり、卒業生にとって、その時空は大学と社会が地続きの“誠二ワールド”なのかと思う。そうしたゼミ生の強固なアイデンティティーと濃密な絆は、誠二さん丹精の“知の圃場”が育んだ極上のヴィンテージというほかはない。誠二さんはやはり、すご腕の〈ディープな教育の達人〉なのかもしれない。

達意の大学「人」 パラレルワールド

誠二さんは、栃木県宇都宮市の生まれだが、中学と高校は、大学と同じエリア・駿河台にある明大付属の中・高で、卒業後はそのまま商学部に進んでいる。付属高校の場合、一般に、卒業後の学部選択は、在学中の成績順位で決まるといわれ、明治大学では、成績高スコアの生徒は、商学部が“指定席”とされているという。誠二さんの場合も多分それで、以後、学部から大学院の、合わせて9年、附属学校も含めて15年におよぶ、駿河台生活を経験したことになる。いうところの《明治一代男》である。とくに大学院生活では、文献や資料の収集と読解、論文の構想や展開など、研究者としての基本的な資質、「作法」とともに、研究者間の交流や連携の人間関係が培われるといわれる。ちなみに、誠二夫人の和美さんは、大学院時代の同門の研究者で、昨年3月まで地元静岡の私立大学・経営学部で会計学担当の教員として教鞭をとり、その間学部長も務められた方である。

誠二さんの“多能”ぶりは、大学行政に関わる組織運営の場面でも如実である。誠二さんは、2004年の法人化に伴う国立大学会計基準の策定に関わり、国立大学協会・法人化特別委員会や大学経営委員会の専門委員、文部科学省・国立大学法人会計基準検討会議や独立行政法人評価委員会委員などを務め、その関連でまとめ、著わした『大学評価とアカウンタビリティ～国立大学の法人化と新会計システムの将来像～』（森山書店、2003年）と『国立大学法人 財務マネジメント』（森山書店、2005年）は、大学運営の実務現場では、必読・必携の文献とされている。

誠二さんの、こうしたキャリアは、静岡大学の学内行政でも力を発揮している。国立大学の法人化に向けた移行・準備期の2003年4月から翌年3月期には、当時の天岸学長に乞われて学長特別補佐に、法人化後の翌04年4月からはそのまま副学長に就任し、07年3月まで財務担当理事として、大学運営の中枢を担ってきた。これらは、法人化に伴う国立大学の制度設計に関わる、全国レベルの専門委員としての経験と知見が、法人化後の大学のシステム構築やその円滑な運営に生かされたことである。他方、誠二さんは、国立大学の法人化に疑義をもち、大学自治の立場から、その制度運用とガバナンスの在り方に批判的に対峙する、教職員組合やその全国組織（全大協など）に対しても、

講演や報告、論稿を通じて、法人制度の仕組みや特性、問題点を指摘・解説するなど、組合サイドの運動への支援も惜しまなかった。ここでも、誠二さんの大学人としての矜持と誠実さ、度量が示されている。

誠二さんは、さらに、副学長・理事を終えた2年後の2009年3月から、2期(4年)にわたって人文学部長・大学院研究科長を務め、その任期中に学部の拡充とともに、旧来の学部名・人文学部を、学部の分野・学科構成の実質に即した「人文社会科学部」への名称変更をなし遂げている。

誠二さんにとって、この10年間は、大学行政の渦中であって八面六臂の活躍をし、奔走した時期であったが、戦後国立大学制度の歴史的転換とされる法人化と直に向き合い、終始、現場感覚で組織運営上の諸問題に取り組み、体制のソフトランディングに力を尽くした貢献は大きい。ここにも、多端な問題群の中で仕事をこなす、“達意の大学人” 誠二さんの姿がある。

誠二さんとの付き合いは、かれこれ40年に近いが、筆者が知りうる誠二さんの多くは、研究者・教育者としての顔であり、大学人としての振舞いである。誠二さんの場合も、当然、その《人となり》は研究者や教育者、大学人としての振舞いの中にじみ出ているが、最後に、必ずしもそこには表れない、人間・誠二さんの“余白”・パラレルワールドにふれておきたい。誠二さんは、意外と運動神経に長けており、アウトドアの世界でもその“片鱗”を垣間見せている。例えば、何度か一緒したスキーでは、けれん味のない滑りでゲレンデを縦横し、また、テニスやゴルフも程々にこなすプレイヤーだと聞いている。また、高校時代は、一時、マンドリンクラブに所属していたとかで、時にはギターをたのしむともいう。まさに文武に長けた、“多能型” 誠二さんの面目である。

また、誠二さんは、かつては相当のヘビースモーカーであり、かつアルコールにもとりわけ“親和性”の高い愛飲家であった。これまで、誠二さんと酒席を共にしたことは多いが、酔うとやや多弁になるくらいで、ハシゴを重ねてもつねに泰然とし、酔いつぶれたのを見たことはない。しかしそれも、ここ数年、体調を崩したことで、タバコの方はきっぱりと止め、酒量も随分、落ちたように見える。一般に、タバコを遠ざけることは“是”とされるが、アルコールに適度に親しむことは、心身の“浄化”と健康維持に有効とされている。その意味で、今後とも、かの酒仙にあやかり、時には「対酌して山花開く」の機会を得たいと願っている。

このあと続く人生のアディショナルタイムで、この社会と会計世界を圍繞するさまざまな動きに感度を研ぎすまし、問題の核心部に迫る“知の営み”を続け、日々、適度な緊張関係の中で過ごすことが何よりの健康法かと思う。そして、この先も京都の研究会

に通い続けることである。これが“人生 100 年時代”を生きる、何よりの知恵と心得、「生涯現役」に徹する誠二さんを期待したい。

以上、与えられたテーマで、縷々書き連ねたが、誠二さんの「人と学問」の実像にどこまで迫りえたか自信はない。とくに、「人」を語ることの難しさを、改めて思い知ったことである。この続編は、なお機会を得て他日を期したい。

Zum Wohl!